
山王学園風紀委員

だだんだん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

山王学園風紀委員

【Nコード】

N5618Y

【作者名】

だんだんだん

【あらすじ】

どこの都道府県にも属さない山王町。
そこは、学園が治める町だった。：

入学試験／歓迎会（前書き）

初めまして。だんだんだんです。

不定期連載&亀更新ですがよろしくお願いします

入学試験／歓迎会

どうも、時雨 徹です。

今、僕大変驚いております。

成績は、中の下

運動神経は、あまり良くない

友達は、普通の人数

アニメオタク

理系

の僕が、

私立山王学園から、招待状をもらいました。

私立山王学園とは、それはそれは有名な高校です。

なんと、その学園が町を一つ治めているのです。

その名も、山王町。

また、山王町はどの都道府県にも当てはまらない、特別な町なのです。

なぜ、そんなすごい学園から招待状なんて来たのだろう？

ともかくとして、僕はその学園の入試に行きました。

山王町は、壁で囲われているため、町の入り口からしか入れません。さらに、町内に入るには許可証が必要なので、とりあえず町の入り口前に集合と言うことになっていました。

それで、町の入り口前で待っていると、
「おつ、新入生か？」

「あつ、はい。」

体格のいい人に声をかけられました。

「学園まで、案内するからついてきな。」

「わかりました。」

その人について行って、学園までたどりつくと、

「その受付で、手続きをすましな。あと、ここから先は案内があるから、がんばりな。」

「はい、ありがとうございました。」

受付に関係書類一式を渡すと、試験会場とかれた部屋に移された。

・・・招待でも試験なのか。

と言っても、机も椅子も問題用紙も見あたらない。

その代わりに、何か人が一人入れるサイズの箱があった。

「その箱の中に入ってください。」

言われる通りに入った。

どうやら機械だったらしく、なんか調べられた後、

「出てきていいですよ。」

と言われたので、出た。

「とりあえず、控え室でお待ちください。」

「はい。」

というわけで、控え室で、待つこと十数分。

「お待たせしました。貴方は、無事合格されました。」

本日は、ここでお帰りいただいて、一週間後にうちの寮に入っても

らうと言うことでいいでしょうか。」

「えっと、卒業式にはでれますよね？」

「ええ。卒業式と、記念旅行には出れるように手配いたします。」

「なら、大丈夫です。」

「では、こちらをご覧ください。この封筒の中には、合格证、入学並びに入寮の承諾書、学園・寮について、

以上の三点が入っております。ご確認ください。」

「はい、大丈夫です。」

「では、学園・寮についてをよくお読みになった上で、一週間後こちらの入学並びに入寮の承諾書を持ってこちらにおいでください。」

「はい、わかりました。」

帰って、親に合格证を見せると、大喜びしていろいろとやってくれた。

中学校への連絡等。

さらに、寮に入るのにあたって、洋服とかそういうものの準備もしてくれた。

寮には、本棚や机、椅子、ベット、冷蔵庫、ガスコンロ、食器類、洗面道具などは、あるらしい。

持ち込みではいけないものが、無いのがまたすごい。

また、持ち込み量の制限が、50×50×50の箱6個分のため、すごい大量に持って行ける。

そのため、箱一つにはパソコン関係一式（デスクトップ＋ノート＋外付けHD＋各種記録メディア＋その他諸々）を入れ、

もう一つに箱にモニターとプロジェクターを入れて、

もう二つには、洋服類を入れて、

ラスト二つには、DVDや、CD、ラノベ、マンガなどを入れた。

そして、この六つの箱を学園に送る。

すると、寮に置いておいてくれるらしい。

とりあえず6点を送った。

さらに、移る前の前の日に承諾書を書いてもらって、準備は整った。

そして、移る日当日、朝家を出て、着いたのがお昼だった。

受付は三時からなので、時間はすこしある。

ちなみに、集合は町の入り口の前と言うことになっている。

近くの喫茶店で、時間をつぶして受付時間となる。

受付を済ませて、町の中に入った。そのまま他の入寮者達と一緒に寮に向かう。

寮では、先輩達が『歓迎！ようこそ山王学園寮へ』と書いた横断幕を持って待っていた。着くなり、すぐに寮へと案内された。

僕の部屋は、四階のはじっこの部屋で、二人部屋なのだが、人数の関係上、一人で使っていていいそうだ。

また、19:00に、一階のホールに集合するまでは、部屋で荷ほどこをしないさい、と言うことだったので、現在パソコンの設置中だ。モニター(×2)を机の上に置き、本体を机の下に、マウス・キーボードを机の上に設置したら、各部を接続、とりあえずLANがここに無いらしいのでインターネットには現在のはつなげないが、完成。

また、壁に模造紙を貼りまくってスクリーンにして、プロジェクターをセットしたら、こちらも完成。

後は、本棚に本やDVD、CDを入れて、

洋服をクローゼットにしまったら、荷ほどこき完了だ。

そのとき、誰かがドアを叩いた。

「はい、どちら様ですか？」

ドアを開けると、女の子がドアの前に立っていた。

「あつ、初めまして。私、隣で寝泊まりすることになりました、五十嵐 小鳩です。よろしくお願いします。」

「僕は、時雨 徹。こちらこそよろしく。」

「では、他の所にも挨拶に行くので、この辺で。」

「ああ。じゃあ、また。」

「失礼します。」

お隣は五十嵐さん、と。

その後、部屋を片付けてアニメを一本見た後に、一階ホールへ行ってみた。

ちょうど時間が19:00になった時、ホールで係の人が何かしゃべり出した。

「えー新入生の皆さん、入学おめでとうございます。これから在校生一同による、入学記念パーティーをやるうと思います。会場案内のため、皆さん私の後に付いてきてください。」

「「「「「ハロー。」「」「」「」

集団で歩いて行くと、やがて会場が見えてきた。
その中にはいると、食事が用意されていた。

「これより、新入生歓迎パーティーをしたいと思います。まず最初に生徒会長挨拶。生徒会長、お願いします。」

「えー新入生の皆さん、入学・・・（略）・・・本当におめでとう
ございます。」

「それでは乾杯をしようと思います。生徒会長の音頭で行いたいと
思います。生徒会長、お願いします。」

「それでは、新入生の入学を祝って、乾杯！」

「・・・乾杯！！！！」

こうして新入生歓迎パーティーは、始まった。

そして、パーティーも終わりに近づいた頃、アナウンスが入った。

「えー祝いの品として、皆さんの部屋の前にプレゼントを置いてお
きました。皆さん、大事に使ってね。」

「では、この辺でパーティーも終わりとします。どうぞ、お食事等
はまだ出しますので、ごゆっくりお楽しみください。」

「

僕は、人混みが大の苦手なので、早めに帰った。

寮に帰ると、部屋の前に何かが置いてあった。

部屋の中に入れて、開けてみると中身はなんと、スマホだった。説
明書には

「これが、生徒証にもなるので大事に使いましょう。」
だって。ただのスマホでは無かったか。

しばらくスマホで遊んだ後、寝ることにした。

散策ノ事件（前書き）

急展開につき、皆様を混乱させかねません。

今回の後書きに、まとめを書きますので、そちらをご覧ください。たはうが、いいかもしれません。

散策／事件

寮住まいの新人生は、今日からしばらくは暇である。

一応、町へのなれる期間ということになっているが、実質、暇人なのである。友達つくったり、遊んだりしていい期間なので外に出る人もたくさんいる。

が、時雨は部屋の中で、DVDを見ている。

時刻は、11:30。昼飯の事を考えていたら、隣からすごい音が聞こえた。

ずがっバーンガラガラガラ。

何があつたんだ？とりあえず隣の部屋に行くことにした。

コンコン。

「あのー私、隣の部屋の時雨と申します。先ほど、すごい音が聞こえたので来たのですが。」

「ああ、時雨さん。鍵は開いているので、入って来てください。」
「どうやら五十嵐さんだ。」

入ってみると、見事に本棚が倒れていた。
幸い、下敷きになった人はいないようだ。

「そういえば、この部屋のもう一人の人は？」

「時雨さん、表札見なかったんですか？この部屋は私一人ですよ。」

「そうなんだ。まあ、大した怪我もなく良かったね。」

「えっと、いづらいのですが、腰を抜かしてしまつて。」

「それはそれは。片付けは僕がやるところ。」

そういうことで、本棚を元に戻したり、本を本棚にいれたり、いろいろとやった。そうして時刻は12:00。そろそろお昼にしよう

「思ったが、一つ問題が。」

「私、立ち上がれません。どうしましょう。」

そう、腰を抜かした五十嵐さんがお昼を食べに行けなくなっているのだ。ちなみに、どの部屋にもキッチンはある。

が、ここには材料がない。買ってきてないそうだ。

「ああ、なんか作ってくるよ。アレルギーとか好みとかあれば聞くけど。」

「特にアレルギーも苦手なものもありません。できれば、ご飯モノがいいです。」

「じゃあ、チャーハンでいいかな。」

「はい。よろしく願います。」

俺はいったん自分の部屋に戻った。

ご飯と卵、叉焼の代わりにベーコンでどうにかなるだろう。それくらいならあったはずだ。

二人分を作って五十嵐さんの部屋に向かう。

「お待たせしました。チャーハンです。」

「どうも、ありがとうございます。」

「いえいえ。ささ、冷めないうちに召し上がれ。」

「いただきます。」

「僕も。いただきます。」

昼食を食べた。

「「ごちそうさまでした」」

「ところで時雨さん、明日暇ですか？」

「僕は暇だけど。何かあるの？」

「明日、町を散策しませんか？」

「いいよ。何時に行く？」

「では、朝九時くらいにそちらにお伺いします。」

「わかった。・・・そろそろ僕は部屋に戻りますね。」

「はい。ではまた。」

「じゃあね。」

と言うことで、自分の部屋。

見かけていたアニメをすっかり忘れてた。

見なきゃ。

その見かけていたアニメを見て、そのほか何冊かのラノベを読んで、その日は寝た。

翌日07:00、目が覚めた。

そこからアニメ見て、天気予報見て、アニメ見て、支度をした。

そして09:00、ドアを叩く音がする。

コンコン

「五十嵐です。」

「はい、今行くよ。」

財布とスマホ、ノパソ、部屋の鍵、その他諸々を持って出て行った。

「どこに行く？」

「そうですね。本屋さんでどうでしょう。」

「いいね。丁度欲しい本もあったし。」

「どんな本ですか？やっぱり厚い参考書とかですか？」

「いいや。ラノベだよ。ほら、結構最近アニメ化してるじゃん。それ見てはまったのなんかを買っているわけ。」

ところで、僕に敬語なんて使わなくてもいいよ。なんか堅苦しいし。」

「敬語をやめるのは難しいかもしれませんが、その代わり、徹君って呼んでもいいですか。」

「無理強いたりはいしないさ。いいよ。僕についてはなんて呼んでも構わないよ。代わりに君のことを、小鳩ちゃんと呼んでも

いい？」

「私は構いません。むしろそっちの方がうれしいです。」

「わかった。」

あ、ついたよ、小鳩ちゃん。」

目の前にはビルがあつた。

その中に大型の書店が入っているらしい。

とりあえずビルの中に入り、案内板を見る。

一階	山王書店	新刊・キャンペーンコーナー
二階	山王書店	文学書
三階	山王書店	歴史書
四階	山王書店	参考書
五階	山王書店	コミック
六階	山王書店	文房具
七階	山王書店	季節の商品
八階	山王書店	喫茶スペース

・・・すべてが書店だった。

「すごく大きいんですね。」

「大きいとは聞いてたけどここまでとは。」

早速僕の目的地、五階に向かう。

今月の新刊をチェックするためだ。

「徹君つて、こんな趣味があるんですね。」

「そういう小鳩ちゃんもこういうの読むんだ。」

「はい。特にこれなんかおすすすめです。」

そういつて手に取ったモノは

なにやら宇宙人や未来人、超能力者が出てくるやつだった。

「ああ、それね。それは全巻寮に置いてあるし、DVDも全部そろっているよ。」

「じゃあ、これは。」

それは、炎をまとった少女が戦うやつだった。

「多分、そういう有名どころは全部寮にあるよ。」

「えー。今度見せてもらってもいいですか？」

「いいよ。いつでもおいで。」

そこで、この階は終わりにして、文具コーナーとかを回って、店を出た。

「すぐおつきかったですね。」

「ここまでの広さとは思わなかったよ。」

ちなみに時刻は12:00。

「そろそろお昼にしようか。」

「はい。近くにレストランでもあればいいんですが。」

「ちょうど、歩いて三分ぐらいの所に、ファミレスがあるから、行ってみようか。」

そこから、歩いて三分。

全国展開のファミレスがあった。

「ここでいいよね。」

「私は、構いません。」

昼飯を食べて、午後は散歩をした。

町のとある自然公園で休憩している時に、事は起こった。

「動くな！」

誰かが銃を持って叫んでいる。

よく見ると、朝ニユースでやっていた銀行強盗犯であった。
何でこんなところに・・・。

小嶋ちゃんは怖がって、がくがく震えているよ。
すると強盗犯は、

「その女、ちょっと来い！」

小鳩ちゃんを指名してきた。

しかし、思うように立てず、もたついてしまう。

「早く来い！」

しかし、立てない。

「早く来いっていつてんだろうが！！」

強盗犯が発砲する。

「彼女はもういいでしょう。あんなに怖がってかわいそうじゃないですか。」

つい言い返してしまった。

「ああ、ヤンのかコラ！」

「暴力沙汰は嫌いです。」

「じゃあ口はさんでんじゃねえよ！」

強盗犯が殴りかかってきた。

が、それは僕に届く前に何者かによって止められた。

「風紀委員です。貴方には色々ありますが、とりあえず暴力行使の現行犯で、逮捕します。」

その人は、あつという間に強盗犯を拘束した。

そのあと警官もきて、強盗犯はどこかへ連行された。

僕と小鳩ちゃんは、風紀委員の人に事情聴取をされた。

「あなた達、身分証は？」

「身分証？僕たち新入生なのでそういうのがわからないんですけど。」

「あれ？配られなかった？あのスマホみたいなやつ。」

「ああ。ならこれです。」

「わたしのも。」

その人はスマホを端末に近づけてなにかしてた。

「はいわかった。一応聞いておくけど、名前は？」

「僕は時雨徹です。」

「私は五十嵐小鳩です。」

「よし。それじゃあ、ここだとあれだし、学園まで来てくれるかな。」

「わかりました。」

そうして風紀委員さんに連れられて学園まで行った。

そこで僕たちは応接室のような場所まで連れて来られた。

「さて。それで・・・」

事のあらましを聞かれた。正直に答えた。

「じゃあ、殴られそうにはなったけど害はなし、ってことでいいね？」

「はい。」

「ところで君たち何で四階？」

「え？四階？」

「何で寮が四階なの？あそこには何か特別な子が行くみたいだけど、あなた達は何者なの？」

「僕たちは至って普通の生徒ですけど。」

「そうかしら。この学校が招待状出している時点で、なにかありそうなものだけど。特別な能力があるとか。」

「いや、招待状の件については確かにその通りですが、僕たちが何か特別な能力持ちではないし、たとえそんでも使った事がないので詳しくはわかりません。」

「そう。ならいいわ。まあ、今の話は忘れて。今日は犯人逮捕にご協力ありがとうございます。」

なんか話を流された気がする。

まあいいや。どうせ覚えてもいいことないし。

時計を見ると、既に17:00だった。

「今日はなんだか大変な一日だったな。」

「ええ、そうですね。」

「強盗が現れたときには、焦ったよ。ここで死にたくないってね。」

「結局、地雷を踏んでましたね。」

「そりゃ、友達がやられそうなのをただ黙って見ているのはだめだろう。」

「でも、あのとき言い返してくれて、とてもうれしかったです。ありがとございました。」

「いやいや。ただ単に地雷を踏んだだけだし。結局助けてくれたの、あの風紀委員さんだし。」

「それでも、私が捕まっていたら風紀委員さんも手が出せなかったでしょう。だから」

「そうですかい。わかったよ。」

「ところで、メアド交換してくれませんか。このお礼とかもしたいですし。」

「わかったよ。赤外線で良かったかな？」

「はい。徹さんのメアド、受信しました。」

「こっちも、受信したよ。」

そして、寮の前。

「じゃあね。また。」

「はい。また。」

その日は家に帰って、ご飯を食べててアニメ見て寝た。

散策ノ事件（後書き）

まとめ

時雨と五十嵐、町に散策に出る。

事件に巻き込まれる。

風紀委員に助けられる。

寮の四階にすむ人の謎を聞く。

時雨と五十嵐、メアド交換。

こんな感じです。

わかりずらくなつてすいませんでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5618y/>

山王学園風紀委員

2011年11月21日10時56分発行